

[編集後記]

千葉医学雑誌84巻6号では、英文原著2編、英文症例報告1編、海外だより1編、千葉医学会例会報告3編、研究報告書3編、雑報1編を掲載させていただきました。

本澤慶憲先生たちによる原著「Decreased expression of the *KAI1* gene involved in progression and metastasis of tongue squamous cell carcinoma」は、前立腺癌で転移抑制遺伝子として発見された*KAI1* 遺伝子が、多種類の腫瘍でその発現が抑制されている事に着目し、著者らの研究領域である舌扁平上皮癌において、その進展や転移にはどのように関与しているのかを報告した意欲作である。また、玉井 浩先生たちによる原著「Knee kinematics do not influence the long-term results in posterior cruciate-retaining total knee arthroplasties」は、後十字靭帯温存型人工膝関節手術後の患者が階段を昇るときの運動様式を評価して、10年後の臨床成績と比較検討した力作である。そして、白戸 勝先生たちによる症例報告「Development of Ocular Ischemic Syndrome Following Cataract Surgery in Patient with Carotid Artery Stenosis」は、75歳男性、両内頸動脈狭窄、右眼白内障、眼内レンズ挿入術施行1ヶ月後、術眼に眼虚血症候群が生じたケースに関するものである。

木野智重先生による海外だより「米国National Institutes of Health滞在13年を経過して」は、著者の言葉をお借りすると「NIH: 世界の医療の発展に寄与する医学の“メッカ”」において、スタッフとして長年研究の最前線で活躍されている様子が感動的に伝わってくるものです。私も1980年代に3年間同研究所に客員研究員として滞在した経験がありますが、当時とはいろんな面で大きく様

変わりしている事がわかり、大変参考になりました。更なるご成功とご活躍をお祈りいたします。

第1157回千葉医学会例会は、神経内科教室例会に関するもので、19題の一般演題、6題の大学院修了者報告、そして内山智之先生による特別講演「神経因性膀胱: 最近話題の過活動膀胱を中心に」からなっています。第1160回千葉医学会例会は、細胞治療学例会に関するもので、33題の一般演題からなっています。そして、第1162回千葉医学会例会は、腫瘍内科学例会に関するもので、39題の一般演題からなっています。

研究報告書は、平成19年度猪之鼻奨学会研究補助金による研究報告で、長谷川 洋先生の「遺伝子改変マウスを用いたGranulocyte-colony stimulating factor (G-CSF) の動脈硬化抑制機序の検討」、三田村佳典先生の「Activator Protein-1 と眼内増殖性疾患の発症機序との因果関係」、荒井 秀先生の「アルキンの触媒的シアノ官能基化を基軸とする新しい分子変換」の3件であります。

関根郁夫先生たちによる雑報「癌臨床試験のデザインと倫理-第II相試験」は、従来から指摘されてきた倫理的問題に加え、分子標的治療薬の登場に伴って出てきた新たな問題等に関する大変重要なもので、これは84巻5号から85巻1号までの連載のひとつであります。

千葉医学雑誌の編集委員長として、今回も充実した内容である事を自負しておりますが、さらに一層の努力を続けて参る所存です。これまで多くの会員の皆様からいただきましたご支援に感謝申し上げますとともに、2009年も相変わらぬご指導と論文等の投稿を心よりお願い申し上げます。

(編集委員長 野田公俊)